

ソーシャルクリニック 巡回型サテライト・オフィス (情報交換会) に参加して

北海道教育大学附属函館中学校 校長
北海道教育大学教職大学院 (函館校)
特任教授 中村吉秀
北海道教育大学附属函館中学校
副校長 白川卓
北海道教育大学附属函館中学校
教務主任 郡司直孝

コロナ禍の影響で何とも言えない日々が続いていたとき、大学内での会議後に、地域協働推進センター長の齋藤征人先生からお誘いを受けました。それは「ソーシャルクリニック(地域課題診療所)の巡回型サテライト・オフィス事業活動に参加してみませんか」というものでした。その目的は「地域と大学の協働(地学協働)を通じて地域住民をエンパワメントし、地域の課題解決力を高め、地域づくりを自律的に進められるようにすること」*であり「地域ニーズの汲み上げ」という未来につながる継続的な取り組みでした。

つまり、いろいろな地域に出かけていき、新教職大学院や附属函館中学校の実践のPRを行うこととなります。特に、新教職大学院としても地域の学校との連携が大きな課題となっていたので、その解決のための効果的な切り口になると判断し、さらに附属函館中学校のICTに関わる実践を中心に交流できると捉え、前向きに活動に参加することとしました。

そこで、巡回型サテライト・オフィスでのプレゼンによる説明の概要を見ていきます。まず初めに2021年度からスタートする新教職大学院の概要を、次に附属函館中学校の実践事例を示し、地域との連携及び課題の解決への支援等を説明していきました。新教職大学院では、現職教員が勤務学校から1年間離れて、研修に取

り組む機会になることを理解してもらい、また研修後その勤務学校に戻り、得てきたことを還元できるというメリットを強調しました。そして、派遣教員にとって学び直しに応えることができる充実したコースになっていることも力説しました。

教職大学院のコース		養成する人材像
学校組織 マネジメントコース	ミドルリーダーとしての経験をらまえて、今後の学校管理職や地域の指導的立場として活躍する野心的資質能力の形成を主眼とするコース	高度教職実践専攻「学校現場における諸課題について、理論的・実践的研究を深め、教師としての使命を自覚し、学校全体を俯瞰して課題解決にあたるための高度な専門的能力及び実践力の形成を図り、授業実践力、学級・学校経営力、生徒指導力、教育相談力、協働思考力及び地域教育連携力を備えた人材を養成する。
教職キャリア形成 研修デザインコース	現職教員としての実践経験を基礎として、学校や地域におけるミドルリーダーとしての力量形成に主眼をおくコース	教職経験が10年以上の現職教員を対象
子ども理解・ 学級経営コース	子ども理解や学級経営に関する力量形成に主眼をおくコース	教職経験が5年以上の現職教員を対象
教科指導・ 授業開発コース	各教科の専門的指導及び教材開発に関する力量形成に主眼をおくコース	現職教員及び学部前准者を対象
特別支援 教育コース	配慮を必要とする多様な子どもに対する専門的な支援に関する資質能力の向上に主眼をおくコース	現職教員及び学部前准者を対象
養護教育コース	子どもの健康を支える保健・健康教育活動等の実践力に関する資質能力の向上に主眼をおくコース	現職教員及び学部前准者を対象

各コースごとの目指す内容についてもふれながら新教職大学院の特徴を簡単に説明しました。

教職大学院の授業の特徴
<ul style="list-style-type: none"> ▶キャンパス合同と修学校別のハイブリット授業 <ul style="list-style-type: none"> ・共通科目・コース科目は4キャンパス合同 ・修学校別の授業も充実 ▶双方向遠隔システム・オンライン授業 <ul style="list-style-type: none"> ・共通科目はキャンパス横断で授業を展開 ・キャンパス内に関じないディスカッション ▶クォーター制(4学期制) <ul style="list-style-type: none"> ・一つの授業が90分×8回で完結 ・多様なニーズにあった授業の提供 ▶平日夜間・土曜開講 <ul style="list-style-type: none"> ・勤務しながら大学院に修学可能な時間割構成



その後、郡司教務主任から、附属函館中学校での実践の概要を示し、連携可能な3つの視点【①「遠隔授業」 ②「遠隔合同教員研修」③「授業・研修のお手伝い」】を中心に解説しました。

令和2年度巡回型サテライト・オフィス事業 北海道教育大学附属函館中学校

遠隔授業

遠隔で生徒をつなぐ

慣れ親しんだ仲間以外に、生徒が自分の意見を伝える、まとめたことを発表する、質問する。離れていても、離れてるからこそ、できることかもしれません。もちろん授業と一緒に作りながら。

遠隔合同教員研修

遠隔で教員をつなぐ

外部講師を呼ぶことは、いろいろ大変でも、遠隔ならば、可能性はどこまでも広がっていきます。聴きたい講演を聴き、多様な先生同士で情報交換・議論をする。社会に開かれた教員研修を、一緒に。

授業・研修講師

授業・研修をお手伝い

遠隔だけではなく、どこへでも行きます。授業を参観することも、授業をすることも、研修の講師をすることも。必要であれば、70台のPCを持って。

ご連絡先

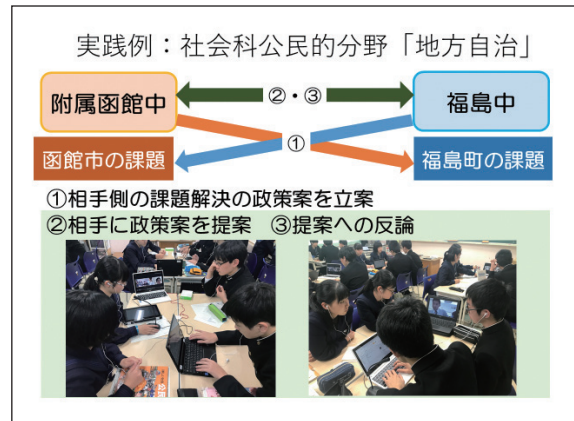
北海道教育大学附属函館中学校
〒041-0806
函館市美原3丁目48番6号
電話：0138-46-2233
FAX：0138-47-6769
E-mail：hak-fuchu@h.hokkyodai.ac.jp

①「遠隔授業」：今、GIGAスクール構想を実現するために、どの地域でもICTの運用に注目が集まっています。そこで生徒一人一台のChromebookを活用した「遠隔授業」の事例を提案しました。

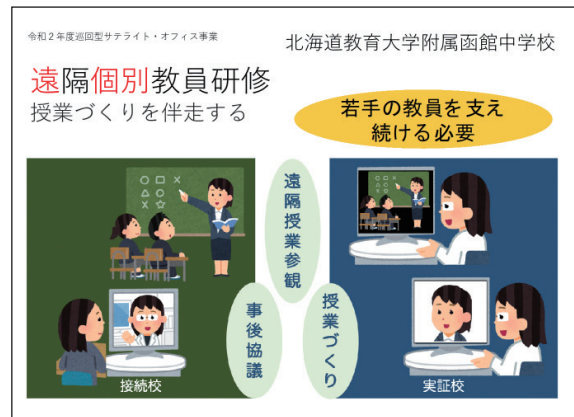
2017～**保護者負担**による一人1台

※2013～**学校からの貸与**による一人1台

福島町立福島中学校との合同の授業実践による新しい学びの広がりから、どの地域でも連携を可能とするシステムの構築を呼びかけました。



②「遠隔合同教員研修」：教員同士の連携による研修の可能性を指摘し、多様な成果について意義を説明しました。



③これらの実績や実践をもとに、各地域の学校での研修のお手伝いをしっかり受け止め協力していくことについて丁寧に説明をしました。

まず、ソーシャルクリニック巡回型サテライト・オフィス活動事業の中で、このようなプレゼンを使用しての説明等では、双方向による関係からの語りになるように心がけました。そして、その地域の教員・生徒たちと「一緒に学びを深めましょう」というスタンスを大切にしました。さらに、その場に出席されている方々の抱える課題は、自分たちも抱える課題としっかりつながっているという意識を持つようにしました。そのことによって、距離感を感じさせな

いようにしたいと思ったのです。

最後に、このソーシャルクリニック巡回型サテライト・オフィス事業活動への参加の試みから、新教職大学院、附属函館中学校として、次年度への方向性を探る方途として3名の感想等を紹介します。

北海道教育大学附属函館中学校 校長
北海道教育大学教職大学院(函館校)
特任教授 **中村吉秀**

今までのソーシャルクリニック巡回型サテライト・オフィス事業活動での働きかけの積み重ねから、それぞれの地域との信頼関係が十分に育っていると感じました。その関係に絡めて【新教職大学院のよさ、附属函館中学校のICT教育の推進、ICTを活用した研修について】の実践事例を示すことができました。次年度以降は、今以上に信頼を得て、効果的に継続できるよう、この初年度の取り組みを大切にしたいと感じています。

2～3の地域から実践の交流や連携を打診されていますが、このことを丁寧に紡いでいくことと、さらに、道南地方として、地域と連携し協働できる体制を構築するために、残されているパワーを活用しなければ、のちのちの進展に大きな影響を及ぼすと考えています。

北海道教育大学附属函館中学校
副校長 **白川卓**

今年度から附属学校の立場からソーシャルクリニック巡回型サテライト・オフィス事業活動に参加させていただきました。地域振興に対する熱い思いや教育大学に対する期待を強く感じたところです。地域の教育委員会における様々な課題を直接伺うことができ、本校のり

ソースを活かすことで課題解決の一助になれば大変有り難いことだと感じています。現在、このソーシャルクリニック巡回型サテライト・オフィス事業活動を機にonlineとICTを活用した合同授業や教員研修等において具体的な連携事業について進んでいる地域があります。それらの取り組みや成果を踏まえ、ソーシャルクリニック巡回型サテライト・オフィス事業活動の取り組みを更に深化拡充し、地域教育の振興に資する附属学校として使命を果たして参りたいと考えています。大変貴重な機会をいただきましたことに心から感謝いたします。

北海道教育大学附属函館中学校
教務主任 **郡司直孝**

私たち附属学校は、「教育に関する地域のモデル校」としての役割を果たすことを使命の1つとしています。この度ソーシャルクリニック巡回型サテライト・オフィス事業活動に参加する機会をいただいたことで、この使命に関わって2つのことを「痛感」しました。

まずは、「教育」のモデル校として果たすべき役割の大きさです。これは本校がこれまでに蓄積してきた様々な研究実践・授業実践を、具体的な方策としてお示しできるものにしなければならないことを痛感しました。

そして、「地域」のモデル校としての役割への気づきです。実際に地域で様々な取組を進めている方々にお会いし、お話を聴くことを通して、地域それぞれに課題があり、願いや想いがあることを、今更ながら改めて実感しました。学校教育が地域のために何ができて、そのために附属学校が何をすべきか、その模索と実践の必要性を痛感しました。

このソーシャルクリニック巡回型サテライ

ト・オフィス事業活動という直接の出会いがなければ、こうした「痛感」は得られなかったと感じています。改めて機会を頂戴した多くの皆様には感謝申し上げるとともに、今後も引き続き、本校の取組や果たすべき役割に対してご教示いただきたいと思います。

※池ノ上真一・古地順一郎「ソーシャルクリニック～地域の課題解決力向上を目指す仕組み～」北海道教育大学函館校地域協働推進センター編集、北海道教育大学函館校ソーシャルクリニック平成28年度活動報告書P3～P5より引用